The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ソピェート・ロシヤに於ける国語教育
Author(s)	松川, 秀郎
Citation	語文. 1954, 11, p. 34-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68450
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ソビェー・ロシヤに於ける国語教育

松川秀郎

ロシヤに於て、国語教育が組織的に行はれる様になったのは十九世紀の半ば過ぎからである。つまり、此の頃に到って、ロシヤに資本主義が成立し、中産階級が強力になり、農奴制度が法的に廃止され、国民初等教育が必要となり、学制が施行せられたのであった。それまでは、ロシヤの近代国家建設が進行した十七世紀半ばに既に大学が設立せられたのであるから、学校と云ふ組織に依る教育組織が知られてゐたのには違ひないが、ロシヤ近代化の恩人と目せられてゐるピョートル大帝ですら余りに性急な近代化移行の功利主義的政治の為に職業教育を行ふ数種の学校しか設立して居らず、又十八世紀の中頃には、国民初等教育の実施が試みられたに拘らず、農奴制度の成文化(一七八五年)に伴ひ貴族が特権階級化し、彼等の子弟は家庭で教育される様になったので、一般の初等教育は殆んど顧慮されなかった。然し、国家の此の様な初等教育に対する冷淡さにも拘らず、寺小屋式の僧侶の経営になる初等教育の学校が十七世紀頃から存してゐたと云はれてゐるので、ロシヤに於ける初等、中等学校の国語教育の起原も此処らあたりに求められるのではないかと思はれる。

十七世紀—十八世紀の寺小屋式の学校ではその組織は進級制ではなく課業に依って、文字の初歩的読み書きを教へる学級、祈禱書を教へる学級、詩篇を教へる学級、算術を教へる学級に分かたれてゐた。即ち、此処では原始的な意味ででは あるが、国語教育が首位を占めてゐた。然し、各部門の国語の授業、読み書き、詩篇及び祈禱書を以てする読み方等も実は祈禱書唯〻一つを教科書として行はれたに過ぎなかった。

十八世紀の半ば、エカテリーナ二世は憲法制定委員会等と共に設置された学校制度設立委員会に命じて学制を作らしめてゐたが、この委員会は一七八六年に到って漸く国民初等教育の制度を答申した。尤も、八〇年代には既にエカテリーナ女帝自身が反動化して居り、左程熱心に学校設立の面倒は見なかったので、一八〇〇年に到っても、設立された国民初等学校は全国で僅かに三一五校、

一九、九一五名の生徒を収容し得たに過ぎなかった。然し、あらゆる文化現象を宗教の手から国家に収めやうとするこの時代の動きの現はれで、この委員会から「人及び市民としての務め」と云ふ本が出された。この本はその名称の示す通り倫理的内容のもので、生徒の暗記を強要したものであるが、唯一の国定教科書として、国語の授業にも利用せられ、一八二八年まで広く学校に於て利用せられた。しかし、上級学年ではこの本は利用せられてゐない。上級学年の授業は主として修辞学で、始めラテン語で教へられてゐたのを、十八世紀の終り頃には当時盛んに飜訳せられた西欧の古典作家の作品の若干を利用する様になり、又十九世紀には、十八世紀後半のロシヤ文学の隆盛に依って西欧作家の作品の飜訳と共にロシヤ人作家の作品を取り入れる事が可能となった。而して十九世紀の第一四半期も過ぎる頃になって、始めてかう云った文学作品を修辞学として教へるのではなく、国文及至は文学として教へる様になった。又十八世紀の中頃ヴェー、イ、ロモノーソフ(一七一一―一七六五)がロシヤ詩法の論争に加はりつゝ、ロシヤ語を研究し初めてロシヤ文法(一八五五年)を書いた事に依って学校での国文法の授業が出来る様になった。然し彼の文法書は初等の学校で利用するには余りに程度が高すぎたので、之を簡略化し教科書用に編纂されたものが種々あらはれた。中でも一八三一年に出版されたア、ハ、ボストコフの「初等簡易ロシヤ語文法」は最も有名である。之を要するに、十九世紀初め頃までは国語教育は初等の読み書き、読本、作文、文法、文学読本等各部門毎に別々の課業として考へられ、又相関聯することもなく授業されてゐたと考へられる。然し、その後、次第に之等の従来別々に考へられて来た課業を国語国文と云ふ名称の下に統一して考へ、又統一的に授業を行はうとする傾向が、県立、県立の初等学校の幾度かの教科目、授業計画改訂を経て現れて来た。

此の様な傾向の最初の理論家はエス、イ、ブスラーエフ(一八一八―九七)である。彼は一八四四年に「国語の授業について」と云ふ二巻よりなる本を著してゐるが、之を若干簡略にした一巻よりなる一八六七年の版は後に永らくロシヤ国語教育の方法論として権威を保ってゐた。此の本は主として国語の初歩的な教育の授業の方法及び、文法の授業の方法について説いたものである。又文学作品を統一的な国語教育の中に取り入れる為の方法論を打建てたのは、ペヤ、スタユ!ニン(一八二六―八八)で自著「ロシヤ文学の授業について」(一八六四年)及び「ロシヤ文学の理論的研究のための指針」に於て之を説いてゐる。然し、国語教育の既述の如き統一性をもたせるのに最も大きな功績のあったのはア、デ、ウシンスキイ(一八二六―七〇)であった。ウシンスキイは字母を逐次並べて、アルファベットの読み方を教へて文字の初歩的教育をする代りに綴字法的方法即ち、単語で教へて行く方法をとなへ、(之については必ずしもウシンスキイが最初ではなく既にペウリンソンが説いてゐる)、又読むことと書くことの同時的な教授法を強調した。即ち、彼は国語教授法を説いた自著「国語」一部―二部、「神の世界」一部―二部に於て教訓的な物語りを教師が折にふれて撰択して国語の教材に利用する様なやり方の代りに周到に用意された計画に基いて、生徒達を四囲の世界に親ませ

てやる様な教材を国語の教材として導入する事を主張した。彼の著「国語」は一九一七年迄に百版を重ね、ロシヤに於ける初等、中等学校、特に小学校の国語教科書の組織に大きな力を及ぼした。

言を換へて云へば、ウシンスキイの国語教育の理論は国語教育を社会教育の場に引き出した事を意味してゐるが、一八六一年の農奴解放、六四年の「国民初等学校令」「中等学校令」等の施行せられた後、七〇年代に再び政府が革命運動の抬頭に依って反動化し、革命家達が農村に於て事を起さんとして、所謂「民衆の中へ」の運動を起す様な社会の下にあって、彼の理論は大いに悦ばれた。即ちウシンスキイの理論はエヌ、ア、コルフに依って受継がれ、農村の小学校に於ける国語教育の理論として発展させられた。コルフは生徒の知識や個人的な観察の表現として作文に大なる注意を払ひ、部分的にも注目すべき教授法を研究してゐる。又此の当時、「戦争と平和」「アンナ・カレニナ」等の作者として有名な文豪トルストイも後半生は民衆の教育に熱心で、自己の領地に自営の小学校を経営した事は衆知の処であるが、彼も亦ロシヤ国語教育に、その計画について大きな影響を及ぼし、彼の著した四巻よりなる国語教科書及び「新読本」は後の種々な国語教科書の中に部分的に取り入れられ、今日ソビエートの国語教科書の中にさえ処々に取り入れられてゐるのが見られる。更に八十年代に於て、ウシンスキイ、フルク、部分的にはトルストイの流れを受け継いで、国語教育を通して当時の有名な反動時代をもたらした政府と闘った国語教育の理論家はエフ、ブナコフ、デ、チホミヲノフ、エリ、ポリソーノフ等である。

しかし、此の様な国語教育の民主的革命的な傾向に対して七〇年代、八〇年代の政府が傍観してゐる筈はなかった。政府は十七—十八世紀の寺小屋式初等教育の流れを汲む教会の管轄する教区附属小学校を奨励普及せしめ、国語教育を社会教育の場から再び昔の宗教の場へもどさんとした。かくして教区附属小学校は一八八四年には五、五一七校であったものが、一九〇四年には実に四二、六九六校に増加し、全体の小学校数の四十六パーセントに達した。更に政府はウシンスキイの後継者達を学校教育の実際面から追放し、彼の理論に基いた国語教科書の代りに宗教的敬虔主義をとり入れた国定教科書(バナノフの著になるもの〻如き)を強制的に使用せしめた。政府の斯様の干渉に対し、国語教師の進歩的な人々は訓読の枠を拡大する教授法を以て之に反抗したが、此の様な教授法の理論家として知られてゐるのはペ、ペペ、ワフテノーフ(彼は多くの教科書と教授法に関する著作がある)、ペ、フレロス、エヌ、ツルボフ、ペ、シェスターコフ、イ、ゴルブーノフ—ポサドフ等である。而して、一九〇五年間の革命前後には再び民主的な国語教育が隆盛に向ふかに見えたが、中等学校の教科書の中へ八十年代には禁ぜられてゐた十九世紀後半の作家の作品を教材として取り入れるのに成功した程度で、あらゆる国語教育の新しい試み、ウシンスキイー、コルフ等の国語教育理論の発展は政府に依って抑圧せられ、それらは部分的に一九一七年社会主義大革命のゝちソビエト政府に依って初めて実施に移されたのであった。

帝制ロシヤを打倒して政権を確立したソビエート政府の国民初等教育、部分的には国語教育は、帝制ロシヤの政府の余りにも貧弱な教育、国語教育施政を見て来た今では一応その成果に刮目させられるものがある。中央集権的独裁力の強いソビエートでは国語教育も亦、他の凡ゆる施政と同様に共産党及び政府の指令に依って決せられ、批判せられ、正されるので、一般的な政策、教育政策と深い関聯性を有する事は云ふまでもない。一九一八年三月新正字法（ロシヤ語の字母を簡易化したもの——例へば我が国語の「あ」と「え」を一つにするが如き方法）が施行せられたが、之は国語教育には勿論、更に大きな分野に大きな影響を及ぼした。而して同年十月十六日には「初等学校等改正令」が出て、当時外国の武力干渉を受けながらもソビエート政府は学制をとゝのへた。二二年—二四年教育界には綜合的教育法なる教育方法が主張され、実地教育に力を入れる様になった。しかし、この教育方法は、時恰かも所謂ネップの時代であり、ネップマンと称する新興ブルジュアジー階級が生じたが、この階級のイデオロギイがこの教育方法に反映し、「学校は職業教育の場」であるとする風潮に代って了った。スターリンの強行的な五ヶ年計画の完遂の後にもたらされた社会主義時代になってこの職業乃至実地教育偏重の傾向はロシヤ共産党中央執行委員会の一連の決議、特に一九三一年九月五日附「初等中等学校について」及び一九三二年八月十五日附、「初中等学校に於ける教科書過程について」に依って批判され、改められた。国語教育は職業教育偏重時代には余り重要視されなかったが、この二つの決議に依って漸くその地位を確立し、今日ソビエートに見られる国語教育の組織と方法を得たのであった。

一九三一年の決議は、諸科学の基礎をよく修得してゐる完全な学問ある人間を養成するのが初等中等学校の目的であると云ひ、国語教育にこの目的を達するための、諸科学を正しく理解するための基礎としての地位を与へてゐる。更に一九三二年の決議は「国語の授業の計画は実際に体系的な、而して正確に、規定された範囲の知識の習得を保証し、また同じく、正しい読み方、書き方および話しの言葉の確実な習熟の習得を保証し、また教室に於ても家庭に於ても自主的に文字を書く作業や文法的に解剖する事等を生徒の学習の作業の実践に引き入れなければならない」と云ってゐる。然らば、今日ソビエートに於ては実際上この決議に依って如何に国語教育が行はれてゐるであらうか。

ソビエートでは高等、専門、大学等上級学校への入学資格が与へられるまでの教育過程を十学年級に分かってゐるが、先ず一年級—四年級の初等学校過程の学校では、国語教育の為に全授業時間の四〇％以上が費されてゐる。詳しく云へば、

	都市の初等学校	郡部の初等学校
全授業時間	三、二一五	三、二〇二
国語の授業時間	一、三三二	一、三七二
一学年級	三九二	三九二
二学年級	三九二	三九二
三学年級	二七四	二九四
四学年級	二七四	二六二

各学年級の授業計画は読み方、作文、文法、書き方（文字の綴り

を正しく書く練習）に分かって行はれてゐる。然し、上述の順序が必ずしも、授業の優先を示すものではなく、凡ての国語の各部門の授業は相互に関聯を保ってのみ各部門の授業の目的が達せられるのである。更に初等学校国語教育の最終目的たる処の、生徒の語彙を豊富にし、自己の思想感情を正しく表現する能力、言葉を正確に繰る事を可能にすることは上述の各部門の授業の中に同時に入って来べきものであるとせられてゐる。而して授業の運営は勿論国語教師の責任の上に課せられてゐるのであるが、その正しい運営のために、生徒の作った作文に対して特別な注意を払ふ事、教室での又家庭での練習問題を撰ぶ場合に特に面白い。教育的価値のあるものを採る様注意すること等が国語教師に要請されてゐる。ソビエート政府はその授業の為に一年級—イロハ読本二冊、国語読本巻一、二年級—国語読本巻二、ロシヤ語（初歩的文法）巻二、三年級—国語読本巻三、ロシヤ語巻二、四年級—国語読本巻四、ロシヤ語巻三を出版してゐる。之を要するにソビエートに於ける初等学校での国語教育は読み書きに習熟せしめ、生徒の口頭、記述に依る自己の感情、思想の発展の能力を伸ばし、文法の基礎知識を随時与へる事をその目的としてゐる。

五年級に始まる中等学校過程では国語教育は文法（形態論、文章論、綴字法、句読点法）作文（口頭及び記述に依る表現能力の養成）読本（文学作品の読解）に分かたれて授業が行はれ、初等学校に比して文法の授業により多くの注意が注がれ、読本に於ては文学に対する鑑賞力を順次養成する様になってゐる。之等の中等学校に於ける国語教育の三部門の授業は別々なものでなく相関聯して行はれなければならない事は初等学校に於ける場合と同じであるが、この点を強調しつゝ、一九三八年の中央委員会の決定は中等学校国語教育を大要次の如く定義づけてゐる。即ち、国語教師は生徒の年令に応じた型式に於て言語の科学の真の基礎を与へる様にする事、文法の学習に際しては部分的に意味論的方面に特別な注意を払ひ、生徒に言語学習に際しては自己の思想力を発展せしめ、且つ正確にそれを表現する事が出来る様に指導しつゝ、ロシヤ語の偉大な教化的説得的な力を認識させ又利用しうる様にすること、更にかやうなロシヤ語は永い歴史的発展の結果である事即ちロシヤ語—国語の歴史を知らしめること、かくして之等を文学作品の鑑賞を通じて行ひ、言語の科学的な見方と、言語の芸術的な力とを自己の思想感情の表現能力を伸ばすことに利用せしめる様指導するにある。これがために中等学校に於ける国語の時間は都会及び郡部の学校を通じて一週間に、五年級は十時間、六年級八時間、七年級六時間が割当てられて居り、これがために編纂されてゐる教科書は、五年級—国文学読本巻五、ロシヤ語文法第一部（形態論）、六年級—国文学読本巻六、ロシヤ語文法第二部（文章論）綴り方練習問題集、七年級—国文学読本巻七等である。要するにソビエートに於ける中等学校国語教育は生徒に国語の意義について、その文法組織について、その語彙の豊富さについて、その歴史の最も重要な諸段階について明確な概念を与へる事を主な目的とし、生徒の自己の思想感情の表現能力を伸ばし、更に国文学鑑賞の基礎的知識を与へることを目標としてゐる。

以上七年級までが教育義務年限であるが、更に高等専門大学等

の諸学校に入るには八年級―十年級の過程をふまねばならない。この上級の中学校での国語教育は主として国文学としての授業であり、国文学の歴史、作家論を編述した教科書国文学―七年級用一巻、古代よりゴーゴリ(十九世紀三十年代)まで、八年級用一巻、ベリンスキー(十九世紀四十年代)よりチュホフ(九十年代)まで、十年級用一巻、現代ソビェート文学(ゴーリキイより現代まで)―と、之と合せて読まれる様に編集された国文学読本巻八、九(第一部、第二部)十、とがこの過程の教科書組織である。而して此の過程は国語授業のために各学年週五時間が割当てられてゐる。

既に処々に於て部分的に触れて置いた積りであるが、ソビェートの国語教育の方法論的研究の成果は、多年に汎る経験と改正を経たもので、今日なほ種々な新しい試みがなされてゐる。因みにソビェートでは「国語教育」なる全国的な国語教師用の専門誌があり、この誌上に毎号新なる国語に関する教育法の研究発表が行はれ、授業上の経験が述べられ、実際授業に於て、又教科書に於て生ずる質疑応答が掲載されてゐる。今それらの試みを一々述べてゐる紙面はないが例へば綴字法の授業に於て、教室の教科書からはなれて、生徒に注意して転写させる、単語を解剖して説明する、予告してある文章を書取させる等の方法が如何なる成果を収めたかゞ述べられたりしてゐる。国語教育教授方法に関しては今日ソビェートでは一般に、初等の読み書きの手ほどき、音韻組織の教へ方に於て、分析―綜合の方法が強調され、文法の教授法に於て意味論的側面に注意し、歴史主義的要素をとり入れ、綴字法、句読点法にかなりの時間をかけること等が多く主張されてゐる様に見受けられる。

最後にソビェート同盟に於ける非ロシヤ人初等、中等学校に於けるロシヤ語教育の問題を簡単に述べて置く。帝政ロシヤの時代には一八七〇年当時の文部省が表明した「我が国の領土に住んでゐる異民族の教育の最終目的は、勿論彼をロシヤ化し、ロシヤ民族と融合せしめる事でなければならない」とする教育方針に依って、国語教育は非ロシヤ民族をロシヤ化し、ロシヤ民族と融合せしめる強力な武器、他民族圧迫の有効手段と考へられてゐた。実際、ウクライナ、白ロシヤ、ポーランド等比較的多数の人口を有し、独立性の強い民族にさへ、各民族語に依る教育は全然許されてゐなかった。ソビェートになってからこれらの被圧迫民族は自主独立を許され、自国語に依る教育を始めたが、各民族共和国自治共和国内に於ける学校ではその設立の当初よりロシヤ語を必須科目と定めた。之れは帝政時代に於けるが如き圧制的なものでなく、レーニンが一九一三年に書いてゐる論文「言語についての自由主義と民主々義」の中で「経済的な提携の必要性は、常に同一国家内に住んでゐる諸民族(彼等が共に住まうと欲してゐる間だけだが)が多数民族の用ひる言語を学ばせようとするものである」と云ふ意見を基にして、共産党が指導したものであると云はれてゐる。然し、ネップ及びそれに続く時代に於て、各共和国及び自治共和国は新興ブルジアジーのイデオロギイを反映して、自国内の学校に於けるロシヤ語の授業を全廃して了った。スターリンの五ケ年計画及びその後の社会主義時代に入って、実際的にロシヤ語の修得が全同盟の人々にとって必要となった諸条件が生じた時、前述

の様なロシヤ語を各共和国が廃止する考へ方は各共和国間の同胞的関係を失はしめ、社会主義文化の建設を阻害するものであるとして、党中央執行委員会は各共和国、自治共和国政府にロシヤ語を初等、中等学校の必須科目にする様要求した。即ち一九三八年の決議がそれであって、之の決議に依って、非ロシヤ人学校のロシヤ語教育のプランが今日の如く定まったのであった。

即ち、非ロシヤ人初等学校の卒業生は簡単な日常会話の出来る程度のロシヤ語の語彙、彼等の生活環境を表現しうる程度のロシヤ語の語学力、基礎的なロシヤ語の読み書きが出来る程度の能力をもたねばならない事になってゐる。而して、此等の教育を行ふための時間数は、二年級週二時間、三、四年級週五時間づゝである。下級の中等学校(七年級まで)の卒業生は自由に且つ正しくロシヤ語で自己の思想感情を口頭並びに記述に依って表すことが出来、その年令に相応した内容のロシヤ語の原書を自力で利用することが出来、ロシヤ語の文法、文章法の基礎的知識及び若干のロシヤ文学の知識がなければならない事になってゐる。この過程に於けるロシヤ語のための授業時間数は五年級より七年級まで通じて、各週六時間である。更に非ロシヤ人上級中等学校に於ては、ロシヤ人の上級中等学校と異って八年級より十年級まで引続き、ロシヤ語の授業が行はれ、充分なロシヤ語の能力を完成しなければならないし、又ロシヤ文学の過程もとらねばならない事になってゐる。

授業の実際上の運営は初等学校では、会話の能力の増進、読本、綴り方に分けて行はれ、下級中等学校では、会話作文、読本、文法及び綴字法、上級中等学校では会話作文及び自力での読書、文法(綴字法及び句読点法を含む)に分けて行はれてゐる。教科書は聯邦及び各自治、民族共和国に於て、各民族語に依る多くの教科書の編纂と竝んでロシヤの各学年用の教科書が編纂され、既に三九年には一六五種に及び、更にその後教科書併用の辞書、壁掛用の文法対照表等が出版されてゐる。

非ロシヤ人初等、中等学校に於けるロシヤ語の教育は、特有な文字を持たない為にラテン文字を借用してゐた弱小民族にあってはそれをロシヤ語の字母にあらためたことに依って非常に容易になった。かくして、今やソビエートではロシヤ語教育は各民族間の共有の言語、民族相互間の友愛、団結を強める手段として解せられてゐる。

ソビエート同盟に於ては国語教育―ロシヤ語教育は「共産主義の理想を達成し、高い文化を築き上げるための最も重要な教科の一つ」である。

―神戸外国語大学助教授―